

司書の彼女と、誰も知らない帰省の夜

清楚系の司書が、梅雨の帰省で距離を縮める——互いを選ぶ決意と、結ばれた後の幸福感

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

彼女は静寂を切り裂くような存在だ。閉館時刻の針が進む直前、広々とした市立図書館の奥深くに佇み、何気なく棚の隙間に身を潜める影が楓だった。夏の日差しが窓から漏れ込み、畳と本棚の隙間からこぼれる微かな湿度に包まれた空間。二人の関係はこれまでに数え切れない回数の会釈や、肩に触れた手の温もりで築かれたものばかりだった。幼馴染として、そして大人になる過程での無邪気な距離感が、今日という特別な瞬間を迎えてもなお崩壊することはないように見えた。

翔は手に持った古書を額縁のような視線で見つめながら、隣りに立つ彼女の呼吸音を耳で捉えていた。梅雨の季風が去って残されたこの暑さ、空気が重なり合う感覚だけが二人を閉じ込めているようで、それは単なる体温の高まりではなく、誰かの皮膚を求めている渴望のように感じられた。彼女が袖口を軽く上げ、指先で冷たい本背を滑らせながら「また、遅刻しちゃったね」と囁く声には、普段とは違う艶やかな響きが含まれていた。

「……でも、私が嫌いならこんなところで待たせるわよ」

彼女は振り返らずに言った。その仕草からは、いつものような愛嬌よりも、今宵だけの緊張感と、禁断の愉しみを孕んだ予感があった。翔はゆっくりと合図を送るよう頷き、ようやく本から目を離して彼女へと視界を集中させた。そこへ至った瞬間、世界は白黒の日常描写から彩り豊かに、あるいは薄暗い影の世界へと反転していくのか。それまで何気なく触れ合ってきた手の平の感触も、なぜか急に敏感になり、彼女の肌から発せられる暖かい香りが鼻腔いっぱいに広がり始めたのである。

『――』

そう呟いて彼女の名前を呼ぶ時、言葉が持つ実体以上に、二人の間に張り詰めた電流のようなものが流れ渡った。それは閉館後の静寂だけが際立つこの空間の中でしか存ち得ない、ありえないほどの親密さだった。これまで数えてみたこともない距離感が、一瞬で縮まり、再び広がるという不協和音が胸の中で鳴り響いていた。彼女は棚の下段にある古本の束を掴み、まるでそれを隠れ蓑にしたかの如く、腰を下ろすことを躊躇う翔を促すように微笑んだ。その表情には、幼い頃からの記憶が混じり合うような純粹さと、同時に大人としての深遠な知恵が交錯していた。

「今夜だけね。誰もいないこの本棚が、私達のための舞台になってしまわないかしら」

その言葉に、翔は喉元で何かが滾るのを覚えた。単なる会話の応酬では終わらない、何かを失うことへの恐怖と、それを味わいたがる貪欲さが入り混じった空気が充満した。彼女はようやく足を動かすと、畳の音を立てずに滑るように翔の膝元に降りてきた。そこに触れた瞬間、彼女の体温が直接皮膚に触れる感触が伝わってくるのがはっきりと感じられた。それは夏の日差しよりも暖かく、冷たい本の背から奪われる冷たさを補って余りある熱意を持っていた。

二人の間を取り除くものはもう何もなかった。これまでの日常が積み重ねてきた無数の瞬間たちが、今まさに頂点へと向かう弾みとなりつつあった。楓の視線が翔の胸元、あるいは首筋といった、これまであまり意識しなかった部位へゆっくりと降りていく様子は、まるで地図を解読しているかのようだった。静まり返った館内には、彼女たちの呼吸だけが重なり合い、時折交錯する息遣いだけが世界を支配していくようだ。

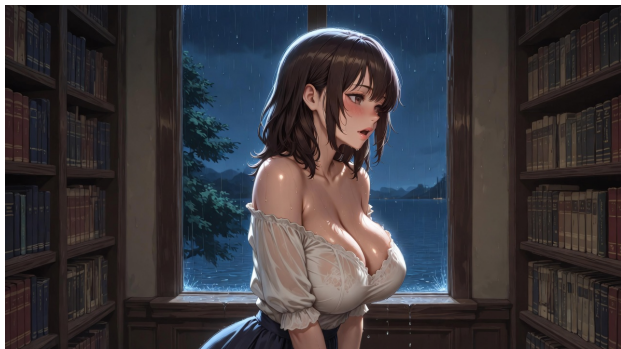
「……さあ、翔君」

彼女の声は囁きに近く、震えを帯びていた。その振動が床板を通じて翔の足先まで伝わり、全身を揺らしてしまいそうだった。今まで通りの愛想笑いではなく、本音が滲み出るような言葉選びで、この一夜が単なる再会ではないことを告げた。棚に並ぶ数冊の本が二人の影を切り裂きながら舞うかの

ように見えた。そこにあるのは、梅雨明けの夕立のような澄んだ空気の中で、二人だけの小さな宇宙が生まれ変わる予感だ。

彼女は翔の肩に顔を預け、髪が額に触れる冷たさと、肌から溢れ出す温もりを同時に享受するようにした。その仕草からは、「いつもの楓」というラベルを剥ぎ取られ、純粋な欲求のままに解放された姿が見えてきた。まだ何も動き出したわけではないのに、すでに空気が張り詰めている。彼女の唇がわずかに動くだけで、何か新しい定義がこの空間に刻まれるように感じる。

翔は彼女の手を引き、ゆっくりと立ち上がった。その一瞬で、重なり合う視線の中に、これまで見えなかった深淵な光が宿っていた。周囲の静寂が彼らの鼓動に合わせて轟くようになり、誰もいない館内に、二人だけが生み出す熱気だけが渦巻いていく。それは終わりのない夜への序章であり、何かが崩壊し、また別のかたちへと再構築されていく始まりだった。



——ここから先は製品版でお楽しみください——